

子どもの運動に対する認識を再考する体育科授業

坂田 行平

1 はじめに

「〈他者〉を楽しみ続ける子どもの育成」に向けて、体育において、子どもが自己の認識の内側に閉じこもってしまい、自己の認識の外側にあるもの（〈他者〉）を受け入れようとしない姿を思い描いたときに、子ども自身が持っている固定された能力観（苦手だなと思う運動はできない、しないという考え）やルール・競争観（ルールは決まっているのだから、文句を言うべきではないという考え）、運動観（速い人・強い人がすごいという偏った価値意識を持った考え）が浮かび上がってくる。

ルールを例に挙げると、もちろん決められたルールを守ることは、競争には欠かせない。一方で、守能（2007）はルールについて「何が面白くて何が面白くないかについての、まさに主観的な判断を中身とする合意的な宣言」と述べ、「あるルールの宣言にそのまま従うとゲームが面白くなるというのであれば、つまり別の関係者がそう主観的に判断するのであれば、そのルールの宣言内容は当然、彼らの手で変えられてよい」とルールは不変でないことを示している。ルールを守るだけではなく、スポーツのルールを参加者の実態に合わせて変化させ、参加者全員が「同時に同じように楽しむこと」ができるような競争をつくり出せることがより運動・スポーツを楽しむことにつながると考える。

本稿では、子どもとともに自分たちに合ったルールを考えることに取り組んだバレーボール実践と「速さ」ではなく「ゆっくり」と泳ぐ世界を味わうことをねらった水泳の実践を報告する。

2 子どもとルールを考えるバレーボールの学習

（1）授業の実際

子どもたちとルールを考えたバレーボール（第6学年）の実践である。子どもたちとバレーボールの学習を行うにあたって確認したことは次の2点である。

- ①「相手コートに打ち返すアタック」をすることを学習のねらいとする。
- ②みんながチャレンジしやすくなるように得点アタックを打つことができたときのみ得点となるルールを用いる。子どもたちと確認したバレーボールのルールは、下記の通りである。

【ルール】

- 3人対3人のゲーム。
- 味方からトスされたボールをアタックして相手コートに入ったら1点。

- アタックしたボールに守備側がボールに触れられずにコートに落ちたら2点。
- 同じ人が2回続けてボールをさわることはいできない。

上記のルールでゲームを行ったものの、安定してボールをつなげることができず、ねらい通りのアタックができなかったため、子どもたちと相談して、キャッチありのルールを導入することにした。キャッチを導入したルールでゲームをしたところ、アタックまでいくプレーが増加したが、子どもたちからはキャッチするだけのゲームだとルールが易しくなりすぎて、面白くないとの意見が出てきた。



図1 バレーボールのゲーム場面

そこで、キャッチは一度にすることにしたが、ここでキャッチするタイミングをルール1とルール2のどちらを選択するのかという課題が生まれた。

ルール1：1人目（レシーブ時）がキャッチする。

ルール2：2人目（トス時）がキャッチする。

この「ルール1とルール2のどちらのルールを採用するか？」という課題に対して子どもたちは次のような意見を出した。

【ルール1（レシーブ時にキャッチ）が良いという意見】

- 1番がキャッチするとあとはトスが上に上げるだけだから、安定する。
- 変な方向にボールがきてもキャッチならボールをとれるし、体勢を立て直せるけど、はじくとなるとはじく準備ができていないうちにきて、変な方向にはじいてしまうから。

ルール1を推す子どもの意見は、サーブをレシーブできずに終わってしまう心配がない、という点とレシーブ時にキャッチできると、ネット際にボールを返すことができるので、トスをする人の位置が安定するという点を考えたものであった。

【ルール2（トス時にキャッチ）が良いという意見】

- トスを確実にした方が点につながりやすいから。
- トスが安定しているから。
- アタックがしやすかった。
- トスの人がボールをうまく受け取りさえすればできる。

ルール2を推す子どもの意見は、トスする人がボールを投げあげられることで、安定してアタックしやすいボールが上がる点を考えていた。

子どもたちの意見からは、ルール1とルール2のどちらにもそのルールの良さがあるため、ルール1とルール2でどちらのルールも良いと思う人がいて、ルールを1つに決めることができなかった。

どうしたらルールを決めることができるだろうかと考えていた時に、「ルールをみんなですべて1つに決めないと困ることは何だろうか。特に1つに決めないといけなくてもよいのであれば、チームによってルールを選んだらいいのではないか」という意見が出てきた。この自分たちのチームでやりやすいルールを選択するという意見は、他の子どもたちも納得するものであった。さらに子どもたちからは、「審判の人がどのチームがどのルールを選んだのかをあらかじめ知っておかないと審判することができないから、ゲーム前に審判に自分たちのチームはどちらのルールで行うのかを教えることにしよう」という意見が出され、ゲームを行うだけでなく、審判も含めてゲームを運営していく視点でもルールを考える姿が見られた。



図2 チームでルールについて話し合う場面

(2) 授業後の子どもたちの感想

下記は、学習カードに記述された学習の振り返りである。

ぼくは、よりねらったところにアタックを打つことができるためにルール2の方がいいと思っていたけれど、同じチームのAさんがレシーブがうまくできないから、キャッチしたいと言っていたので、ぼくのチームはルール1にしました。ボールをつないでアタックすることができました。

この子は、自分の考えよりも苦手な子の考えを優先してルールを選択している。自分たちのチームに合ったルールを話し合いの中で合意することができたのは、運動技能が違う子同士が、お互いの考えを尊重しながらよりよい運動をするために関わり合うことができたからだろうと考える。

3 子どもの運動観をゆさぶる水泳学習

(1) 授業の概要

子どもたちの運動観を広げるために国語科と連動して行った水泳学習の実践を紹介する。子どもたちは、オリンピック等の水泳競技の観戦やスイミングスクールの経験等から、泳ぎの上手さを「何秒で泳げた」という「泳ぎの速さ＝手のかきや足の蹴りに力を入れた泳ぎ（動きの激しい泳ぎ）」に見出すようなイメージを持ちやすい。しかし、速く泳ぐことは、泳ぎの楽しみの一つの側面に過ぎない。泳ぎの楽しさは、

力を抜いて水の流に身を任す心地よさや距離的にも時間的にも長く泳ぎ続けられること等も含まれると考える。そこで、萩原朔太郎の詩作品「およぐひと」を読み、詩の中で表現されている泳ぎをイメージすることで、「泳ぎの速さ」以外にも泳ぎの世界が広がっていることを想起させて、水泳の見方（運動観）を広げたり、深めたりするきっかけにできないかと考えた。

およぐひと

萩原朔太郎

およぐひとのからだはななめにのびる、
二本の手はながくそろへてひきのばされる、
およぐひとの心臓はくらげのようにすきとほる、
およぐひとの瞳はつりがねのひびきをききつつ、
およぐひとのたましひは水のうへの月をみる。

授業のねらいとして下記の3点を設定した。

- ①子どもたち自身が思い描いた「およぐひと」のイメージを「泳ぎ」というパフォーマンスに具現化する過程で、脱力したウキを学ばせたい。
- ②「泳ぐ」とは、手のかきや足の蹴りを強く速く動かすことによる力強い泳ぎで速く泳ぐこと（速く泳ぐことが評価される、いわゆる競泳の世界）の一面だけではなく、気持ちよくゆったりと水の世界を楽しむように泳ぐことも、泳ぎの楽しさであることを味わわせる。
- ③イメージとパフォーマンスを行き来する過程で、子ども同士の交流（相互観察やアドバイス）を深める。

（2）授業の実際

体育の水泳学習と並行して国語で「およぐひと」の詩作品を取り上げた。「およぐひと」は、萩原朔太郎によって書かれたわずか五行の短い詩である。題名の通り、泳ぐ人を対象に取り扱っているが、「およぐひと」の「からだ」、「こころ」、「瞳」、「たましひ」など、泳者を俯瞰したり、その内面から描いたりしている作品である。

国語の授業では、読み手が泳者を外側から見ていたのがいつの間にか泳者と一体となりながら、泳ぐという行為に伴う独特な時間軸を感じることでできるように詩の言葉から泳ぎのイメージを膨らませていった。子



図3 国語の学習場面

どもたちは詩から次のようなイメージを持った。

○しずかな泳ぎ	○流されている	○ういている
○生と死の間（音がないような感じ?）	○やわらかい泳ぎ	

水泳学習では、「およぐひと」の詩で考えたことを想起し、どのようなイメージで泳ぎたいかを泳ぎのリズムとして共有した。足の蹴りの強さや伏し浮きで浮いている時間的感覚を泳ぎのリズム（スーと浮いている等）として表した。ペア学習を取り入れることで、自己の運動感覚による運動の自己観察だけでなく、他者観察を行い、相互観察やアドバイスといった子ども同士の交流の機会を設けた。イメージした泳ぎと自分の泳ぎの感じを比べることで、ゆったりとした泳ぎに取り組む姿が見られた。



図4 水泳の学習場面

（3）物語評価の実践（ヒロガルシート）について

本校では、〈他者〉を楽しみ続ける子どもの姿を見取る方法として、図5に示した「ヒロガルシート」を取り入れている。「ヒロガルシート」は、「〈他者〉と出会う」「〈他者〉をよく知る」「〈他者〉と自分をくらべる」「自分が新しくなる」という様相について、子どもたちが記述するものである。

ふりかえり

〈他者〉に出会う	およぐひとの詩にでてくるおよいでい	およぐひと おーぐい
〈他者〉をよく知る	る人との泳ぎとくらべて少しうかう なと思いました。なぜなら、そのおよぐひと は、なかに浮かべておおいでいるのに、私は	あは あは
〈他者〉と自分をくらべる	初めてプールをして泳いでいるからで、前は、 前のプールとくらべると、変わってきたなと	前 プール
自分が新しくなる	思いました。理由は、およぐひとの詩を通 して、水のときにバシバシしなくなりました から、なめらかに泳げることができたからで	う う

ふりかえり

〈他者〉に出会う	およぐひとの詩のように泳
〈他者〉をよく知る	ぐ、ゆっくりと泳いでいるように 泳ぐことはできていたと思 います。しかし、泳ぎはされ
〈他者〉と自分をくらべる	るはまああでした。でも、 この詩にあった泳ぎ方をす
自分が新しくなる	ると、ういている感じなので とても気持ちよくなりました。

図5 ヒロガルシート

水泳学習と国語の詩学習との「ヒロガルシート」では下記の記述が見られた。

○およぐひとは、しずかでゆるやかな泳ぎだと思うので、そうするためには、ゆっくり動いて、なるべく音を出さないように、足はなるべく水の中で動かすように

すると、しずかでゆるやかな泳ぎにすることができました。

○私は「およぐひと」の詩を想ぞうして、実際に泳いでみて、ゆっくりとけつてうく、としぜんとながされている感じがしました。

○詩を読んでイメージしたことをやってみると、うく時はイメージ通りになったけれど、何かがひっかかった。それは息だった。息つぎをいきおいよくするとゆったりイメージとちがう。

○およぐひとの詩のように泳いで「ゆっくりとういているように泳ぐ」ことができていたと思います。この詩のように泳いでいると、ういている感じが感じられるので、とても気持ちよくなりました。

上記の記述から、ゆったりと泳ぐためには、足のけり方や息つぎの仕方に着目したことがわかる。また、その泳ぎを「気持ちよくなりました」と記述していることからゆったりとした泳ぎを楽しんでいる様子が伺える。

○K君の泳ぎがものすごく力がぬけていて、見ていて「およぐひと」みたいだった。何も考えずに、ういている感じかなと思った。

○私は「およぐひと」を読んで、「軽くうく」というイメージを持った。でも、実に「軽くうく」のイメージではうまくできませんでした。「クラゲのようによく」という他の人のイメージでやってみるとうまくできた。

また、上記の記述は、ペア学習でお互いの動きを見合う活動の中から生まれた気づきである。子どもたちが詩からイメージしたことをもとにゆったりとした泳ぎを楽しむことができたのではないかと考える。

4 おわりに

子どもたちが運動を楽しめるためには、運動能力が異なっていたとしても、運動がわかることが大切であると考え。そしてそれは、今まで自分が抱いていたものとは違う運動観や競争観が新たに形成されたり、互いの気持ちや想いを尊重しあいながら共通の価値実現ができたりすることだろうと考える。今までの自分とは違う見方ができる授業の在り方を今後も追究していきたい。

〈文献〉

- 1) 山中勇夫「〈他者〉を楽しみ続ける子どもの育成 4年次」『学校教育』1272号, 2024年
- 2) 梅澤秋久『体育における「学び合い」の理論と実践』大修館書店, 2016年
- 3) 守能信次「スポーツルールの論理」大修館書店, 2007年